中世から近世の人びとはどのように世界認識をしていたか

―南瞻部洲万国掌菓之図の教材化―

立教教新座中学校・高等学校　荒井雅子

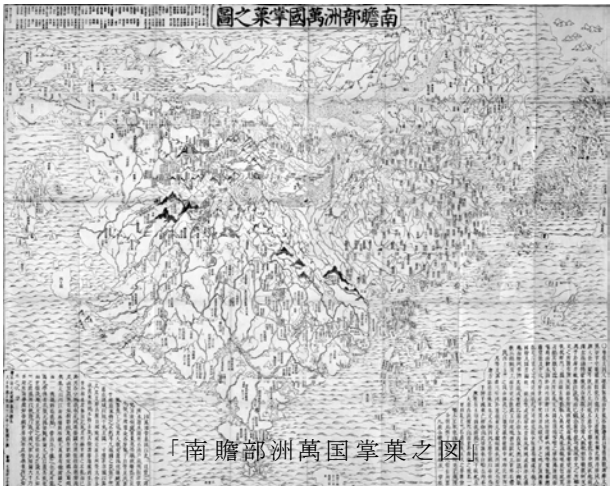
１．実施学年及び教科・領域
（１）学年・教科・科目：高等学校第１学年　地歴公民科　世界史 B
（２）領域：世界史 B（４）諸地域世界の結合と変容
　　オ　資料からよみとく歴史の世界

２．学習のねらいと博物館の活用との関連について
（１）主題名「新しい文化との出会い」
（２）ねらい
　高等学校学習指導要領地理歴史編では、世界史分野においても地図・絵画・資料の活用が求められているが（「年表、地図その他の資料を積極的に活用し‥・具体的に学ばせるように工夫する」『高等学校学習指導要領』世界史 B　３（１）イ))、言語の制約が大きいために一次史料を教材にした授業を展開することは、他の社会科系科目に比べるとハードルが高いように思われる。言語の制約が比較的少ないという点で絵画資料の利用頻度が高いもの、鑑賞・観察に留まらずに「非連続型テキスト」(図・グラフ・地図などの文章以外の資料のこと）を読解するという、今回の学習指導要領で求められるような活用方法（「資料を多面的・多角的に考察し、よみとく技能を習得させる。」(『学習指導要領』世界史 B　２（４）オ)）に結びつけるためには、さらなる読解の作業や手順の構築が必要である。
　この実践は、資料を積極的に活用し、具体的に学ばせ、資料を読み解く技能を習得させることを目指す。利用する非連続型テキストは、「南瞻部洲萬国掌菓之図」(地図）である。地図は、地図制作者の知的背景を反映するため、書いてあることの理解とともに、何故書かれたのか／何故書かれていないのかを推し量ることで、背景となる文化への理解に繋がる、読解のためには格好の素材である。
　対象とするのは「(４）諸地域世界の統合と変容　ア　アジア諸地域の繁栄と日本」に相当する単元である。中国を中心とした冊封体制のもとでゆるやかに繋がっていた東アジアに、ヨーロッパ人が到来し、新たな知識が伝わり（マテオ＝リッチの「坤輿万国全図」など)、日本でも南蛮人との接触で新たな知識を獲得し、世界の姿が明らかになってゆく時代である。日本には「坤輿万国全図」が伝えられる以前には、仏教に基づいた独自の世界観があった。古い世界観の具体例として、「南瞻部洲萬国掌菓之図」を利用する。この図を詳細に観察することで、中世から近世の人びとの世界理解に対する変化を読み取っていく(詳細は（３）に)。
（３）博物館との関連
　①利用した歴博の資料
　　今回は歴博館蔵資料データベース（博物館館蔵資料の検索が可能）で公開されている

資料のうち、「南瞻部洲萬国掌菓之図」（資料番号 H110－2－92）を利用した。これは第３
展示室「絵図・地図にみる近世」でも展示されている。「絵図・地図にみる近世」には当時の地図や絵図が展示され、多様に把握された世界の姿を実際の資料に基づいて確認できる。展示コーナーの中では、その特徴的な形から「南瞻部洲萬国掌菓之図」が一際目立っている。

データベースの資料を活用することで、非来館型の学びも可能である。今回は歴博に依頼し画像を出力してもらい、教材として利用した。データ化された資料は、教室内のICT化にも対応できる教材として、今後の利用の可能性は高いと考える。

②「南瞻部洲萬国掌菓之図」について



「南瞻部洲萬国掌菓之図」

本図は天竺図の一種で、18世紀初頭に仏僧鳳潭（ほうたん）によって描かれた。日本では古くから世界をインド・中国・日本の三国として把握し、インドを中心に描いた天竺図が存在する。背景になるのは仏教的世界観で、標題にある南瞻部洲（または瞻部洲）とは、世界の中心にそびえる須弥山（しゅみせん）（神々の住む巨大な山）の周りを囲む海の上にある大きな島のことである。須弥山の東西南北には大きな島（大陸がそれぞれ４つあり、人間は、そのうちの南側にある島（瞻部洲）に住んでいる。このような世界観は、『倶舎論』という経典に記され、インドから中国を経て日本に伝わった。つまり南瞻部洲とは人間世界のことで、「南瞻部洲萬国掌菓之図」は18世紀の日本における伝統的な世界像を代表する作品といえる。

江戸時代はそもそも、洋学、蘭学、が流入しそれらの知識が伝統的な知識と置き換えられてゆく過程であるが、その過程だからこそ「伝統」を強く意識する作品が生まれたと考えられる。しかしその形は伝統を寸分違わず伝えるのではなく、当時交流があった諸外国から流入する新しい知識を意識せざるをえなかった。そのため、旧来の天竺図にはない国名、地域名が地図上に散見できる。

江戸時代にはマテオ＝リッチ系、蘭学系、仏教系といった、性質が異なる地図が共存していた。今回教材とした「萬国掌菓之図」は、新たな情報と仏教的な三国世界の調和の維持を目指した配慮に基づいて作成された、鳳潭の詞書きを読むと、この地図の目的は既存のいい加減な知識を整理し、儒学者が陥る中国中心的世界観を正すことにあったようだ。

③どのように利用したか

授業内に提示する素材として、フォトランゲージの手法[註1]を参考に、A2 大に印刷したものを読解の素材として利用した。各班（４人／班）に１枚の地図を渡して、ワークに答える形で、読み解きを進めた（読解の方法については３（５）に）。

３．指導計画

（１）指導計画

単元『詳細世界史　改訂版』(山川出版社　2013年) 第７章　　第２節

	単元	内容
事前	第７章　第２節　明清の文化	・明・清の時代の社会変化と西洋文化の流入を、イエズス会宣教師の活躍を軸に学ぶ
本時	第７章　第２節 新しい文化との出会い	・新しい知識が東アジア（日本）にもたらした知的影響について学ぶ。
事後	なし	ワークシート返却

（２）本時の目標

①仏教的な三国世界観に基づいた世界観を理解する。【知識・理解】

②明・清の時代における西欧文化の紹介事例について把握する。【知識・理解】

③三国世界観に基づいた日本の世界理解に、欧州の情報が追加された事を読み取る。【資料活用の技能】

④新しい世界観の浸透は江戸時代を通じて徐々になされたことに気がつく。【思考･判断】

（３）本時の授業案

過程	時間	○学習活動　●学習内容	□指導上の留意点　■評価の観点
導入	５分	○16 世紀～17 世紀初頭の日本と中国の関係について確認する ●日明貿易が行われていたが、担い手の大内氏が滅亡して途絶し、以降は後期倭寇が活動していた。 ○本時の取り組みを確認する ●明・清文化の復習／日本との関係	□中国史と日本の関係を作るために、日明貿易～後期倭寇、日本の南蛮貿易の始まりなど、17 世紀初頭の時代背景を明らかにする。 □宣教師による欧米文化の紹介への布石になるので、スペイン・ポルトガルのアジア地域進出や宣教師の来訪に触れる。
展開 ①	５分	○明から清にかけて、宣教師がヨーロッパの知識や技術を積極的に紹介したことを確認する。 ●交易関係を通して、日本にも同じような文化が伝わったのではないかと推測できる。	□既習事項の確認 マテオ＝リッチの「坤輿万国全図」→新大陸まで書き入れた世界図／ブーヴェの「皇輿全覧図」→中国の実測図に言及し「坤輿万国全図」は中国にとっても新たな世界像だったことを伝える。 ■明･清の時代における西欧文化の紹介事例について把握する。 ＜知＞
②	10 分	○西洋文化と接する以前の日本は、世界をどのように把握していたの	□「萬国掌菓之図」はインド、中国、日本から成ることを伝え、地図上

③	20 分	かを考える。 ●インドと中国と日本が世界（＝三国）だと思っていた。 ○仏教的な世界観とはどのようなものか確認する。 ●仏教的な世界とは、須弥山が中心に立つ巨大な円盤の上に、方形の山と海に囲まれたもの。海に浮かぶ東西南北の４つの大陸のうち、南側に人の住む大陸（南瞻部洲）がある。 ○「南瞻部洲萬国掌菓之図」を読む。 ・中央には何が描かれているか。 ・全体としてどのような姿か。 ・日本はどこに描かれているのか。 ・日本の対極（西）に何が描かれているか。 ●中央に無熱悩池と４本の川がある。 円形（うちわ型）の大陸と海、日本は東の端にある。 三国以外の地域の取り込み：欧州は西の端に描かれた。	で確認させる。 □難解になるので、概略に留める。プリント配布（概要別紙） ■仏教的な三国世界観に基づいた世界観を理解する。＜知＞ □４人×10 班、班毎に地図配布（グループ作業） ②の学習事項を地図上で再確認させる。 □これは新たな情報と仏教的な三国世界の調和の維持を目指した配慮であることに触れる。 ■三国世界観に基づいた日本の世界理解に、欧州の情報が追加された事を読み取る。＜技＞
まとめ	10 分	○江戸時代の世界認識を確認する。 ●①奈良時代から続く、仏教系の世界観が根底にある。 ②日本にも西洋の文化が紹介され、影響を及ぼしていた。 ③江戸中期の「萬国掌菓之図」は、①と②の整合性を図る試みであった。 ④江戸時代には性質が異なる２つの地図が共存していた。	□ワークシートに記入を促した後で、本時の作業の確認する。 江戸時代までは、仏教的知識によって裏付けされた地図が描かれていたことを確認し、２つの地図を比較しながら、本時の目標③についての気づきを促す。 本時の目標④の後半、江戸時代を通して仏教系世界図が西洋的な世界図に置換されたことについては、まとめとして伝える。 ■新しい世界観の浸透は江戸時代を通じて徐々になされたことに気づく。＜思＞

４．実践の概要

（１）実践日：2014 年１月 16 日 高等学校第１学年　男子 40 名

（２）実践の概要

非来館型。高等学校第１学年必修世界史 B（４単位）の授業のうち、１時間を利用した。指導計画上は、第２節明・清の文化（２時間扱い）のうちの１時間を使った実践であったが、冬休みと諸行事の関係で、事前学習との時間が空いてしまった。教室内に４人の班を 10 班作り、各班に A2 大の地図を配布し、授業を開始した。板書事項は最低限にとどめ、作業の結果は補足説明を含むワークシートに記入した。読み解きをするには地図が少し小さかったが、生徒は興味を持って観察していた。

５．成果と課題

（１）読図の構成

実践前には、地図（非連続型テキスト）の読解について、以下のような予測を立てた。

第一段階

日本、天竺、中国の位置関係から、当時の世界認識を言葉に置き換える段階である。この段階では、以下のような発問が有効であると思われた。「地図の中央には何が描かれているか」「地図全体としてどのような姿か」「地図上で日本はどこに描かれているのか」「日本の対極（西）に何が描かれているか」などである。地図の東西の記述について注目すると、この図の特徴が読み取れる。ただし、地図の中央には仏教的な世界観に基づいた様々な仕掛けがなされているので、そちらに注目することも促した。中央に池（無熱悩池）と４本の川。円形（うちわ型）の大陸と海と無数の島があり、日本は東の端にある。西の端にはカタカナの島がある。などに気がつくのではないかと思われた。

同図拡大（西側）
エウロパ、インケレス、イタリヤの文字

第二段階

地図上の様々な情報を読み取り、情報の関係性に気がつく段階である。以下のような発問が有効であると思われた。「地図上で発見した情報のうち、似通った情報を探しなさい。」「『異域』とみなされる情報を探しなさい。分布や描かれ方の特徴を見つけなさい」。その結果、「異域」は、日本から遠いところに描かれていること、日本の近海にも（海の上に）描かれていること、ヨーロッパ等の新しい情報が追加されているものの、基本的には天竺図の形を踏襲していること等に気がつくのではないかと思われた（実践時には「異域」についての言及は避けた）。

第三段階

地図に描かれた情報に更に外の情報を加えて、その地図の情報以上のことを読み解こうとする段階である。外の情報は、生徒自身が考えても良いが、比較的得やすい類似の情報として、授業内で「坤輿万国全図」を示しておいた。蘭学的な世界像と、仏教的な世界像が交錯し、置換されてゆくことに気がつくのではないかと考えた。この気づきを促す発問としては、「地図の東西に注目し、二つの地図の地理的な共通点を探そう。」「何故、三国世界に描かれなかった世界が挿入されたのか考えよう。」「江戸時代には世界をどのように捉えていたのか、考えよう」という段階的な問を考えが、作業の繁雑さを配慮し、実践時には自由記述という形で感想を求めた。

（２）成果

ワークシートには、30 人が自由記述の感想を書いたので、それを前述の３つの読解段階に分類した。第一段階に相当すると考えられる感想は 10 人、第二段階 14 人、第三段階は 6 人であった。ここでは、第三段階の生徒の感想文を、彼らが地図以外のどのような情報を用いてこの地図を読み、そこからどのような結論を出したのか、分析した。その結果、作者の宗教的価値観などの内面に注目した場合、授業内での既習事項を振り返った場合に分けることが出来た。また、「萬国掌菓之図」に対する読解を深める方向性と、この作業を通して他の知識について、理解を深めようとする方向が生まれたことがわかった。

感想文とその分析

Ａ：新しい文化が流入して古い文化が否定されがちだが、新しい文化と古い文化の良い所を残して古い文化がすたれるのをさけた。

→地図が描かれた精神的背景をの形成には宗教的価値観が大きな影響を与えていると考えている。

Ｂ：細かく荒々しく描いているが読み取りにくいと思う。富士山が大きく描かれているので、その頃から何かしらの良い評価がされているとみえる。

同図拡大（東側）
富士山と「富士」の文字

→富士山に注目し、その描写の特殊性に気がついた。それを「良い評価」と表現することで、地図を描く側の価値観（内面的要素）が反映されているという事に気がついている。

Ｃ：広い範囲の地名や地形などの詳細がわかるほどの情報網が既にあったことが分かった。うずまきが何か疑問に思った。

→地図上にユーラシア大陸東西の地名が掲載されていることに気がついて、それを情報網が構築されていたのだと類推することができた。

Ｄ：交易ネットワークが狭かったため、描かれていない国もある。

→地図の情報が少ないことについて、既習事項を利用してその理由を探ろうとしている。本時の導入が冊封体制の確認であり、冊封体制は東アジア・東南アジア域内の中継貿易に繋がることが既習だったことからの結論だと考える。

Ｅ：当時の測量技術が割と高かったこと。東洋の文明は西洋に遅れをとっていたこと。

→想定と実際が違う時に、その合理的な理由を探そうとしている。測量技術については、「皇輿全覧図」が実測図であったことからの類推ではないかと思われる。地図の描かれ方を参考にした文明の東西比較の部分は、他の情報を使うことで、新たな考察をしている。

Ｆ：昔からあった地図と今の地図がまざり面白い形になっている。そのせいでヨーロッパやアフリカが小さくなってしまっている。

→昔の地図＝仏教系世界図、今の地図＝西洋系世界図と理解し、地図情報の新旧交代に触れている。欧州の描かれ方に注目することで描写の違いを明らかにし、仏教系世界図の特性を読み解こうとしていた。

（３）課題

本実践は地図の読解力を高めることを目指し、具体的には生徒の読解力が、第二または第三段階に到達することを目指した。対象生徒 40 名のうち、第三段階に到達したのは６名（15％）、第二段階は 14 名（35％）であった。第三段階まで進んでいた生徒の割合は予想以上であったが、一方で感想記入まで到達できない生徒が 10 名（25％）いた。

今回の実践のように、資料や実物をじっくり観察し、そのものが内包する文字ではない情報を読み解く力（非連続型テキスト・リテラシー）は、繰り返される実践の中で育成される。授業と連動した実践例を蓄積し、生徒の読解力を深めていきたい。

６．わたしの考える歴博活用法

歴博は、その展示の性質から、日本史や中学校（歴史分野）での活用例が多い。館蔵資料を世界史教育にも活用できないかと考えた実践が今回の提案である。多少発展的内容になるが、資料読解が求められている以上は、歴博の資料は授業で利用価値のあるものだと考える。

実践では仏教的世界観の説明を行ってから読図に入ったが、事前の情報付与は純粋な意味での読解の深化の力をつけることにはならない。そこで、読解の深化を図ることを第一に、授業案を再考した。

過程	時間	○学習活動　●学習内容	□指導上の留意点　■評価の観点
導入	５分	○本時の取り組みを確認する。 ●明・清文化の復習／日本との関係 ○明から清にかけて、宣教師がヨーロッパの知識や技術を積極的に紹介したことを確認する。 ●交易関係を通して、日本にも同じような文化が伝わったのではないかと推測できる。	□マテオ＝リッチの「坤輿万国全図」を資料集で確認し、中国にとっても新たな世界像だったことを伝える。 ■明･清の時代における西欧文化の紹介事例について把握する。＜知＞ □西欧文化は日本にも伝わったが、日本にも独自の地図があり、本時はそれを読むことを確認する。

展開 ①	15 分	○「南瞻部洲萬国掌菓之図」の読図 ○描かれていることを言葉にする。 ○山、池、海、島々など、描かれている要素の類似点を探し、グループ化する。 ●グループ化により、どのような情報が描かれているのかがわかる。全体として何を伝えようとした地図なのか、考える。 ○西洋文化と接する以前の日本の世界観について考える。	□班毎に地図配布（グループ作業）
②	20 分	●インドと中国と日本が世界（＝三国）だと思っていたことを知る。 ○仏教的な世界観を確認する。 ●仏教的な世界とは、須弥山が中心に立つ巨大な円盤の上に、方形の山と海に囲まれたもの。海に浮かぶ東西南北の４つの大陸のうち、南側に人の住む大陸（南瞻部洲）がある。 ●三国以外の地域の取り込み：欧州は西の端に描かれた。 ●この地図には伝統的な世界と新しい知識が共存している。	□「萬国掌菓之図」はインド、中国、日本から成ることを伝え、地図上で確認させる。 □難解になるので、概略に留める。 ■仏教的な三国世界観に基づいた世界観を理解する。＜知＞ ■三国世界観に基づいた日本の世界理解に、欧州の情報が追加された事を読み取る。＜技＞
まとめ	10 分	○江戸時代の世界認識を確認する。 ●①奈良時代から続く、仏教系の世界観が根底にある。 ②日本にも西洋の文化が紹介され、影響を及ぼしていた。 ③江戸初期の「萬国掌菓之図」は、①と②の整合性を図る試みであった。 ④江戸時代には性質が異なる２つの地図が共存していた。	□２つの地図を比較しながら、本時の目標③についての気づきを促す。本時の目標④の後半、江戸時代を通して仏教系世界図が西洋的な世界図に置換されたことについては、まとめとして伝える。 ■新しい世界観の浸透は江戸時代を通じて徐々になされたことに気がつく。＜思＞

７．書誌情報

●web 上のデータは、博物館の資料を教室に持ち込むには有益である。
１）高精細画像
・南瞻部洲萬国掌菓之図（九州大学デジタルアーカイブ）

http://record.museum.kyushu-u.ac.jp/nansen/nansen-top
・坤輿万国全図（東北大学附属図書館　狩野文庫画像データベース）

http://dbr.library.tohoku.ac.jp/infolib/user_contents/kano/ezu/kon/kon.html
２）歴博画像データベース（http://www.rekihaku.ac.jp/gallery/db_detail.html）

南瞻部洲萬国掌菓之図　H110―2―92

萬国掌菓之図　　H―110―2―30

●南瞻部洲萬国掌菓之図や地図史に関する研究は以下を参考にした。

青山宏夫　「近世日本の世界図」　『歴博』116

佐々木閑　『仏教は宇宙をどう見たか（DOJIN 選書）』　科学同人　2013 年

定方晟　『須弥山と極楽』　講談社現代新書（330）1973 年

三好忠義　『図説世界古地図コレクション』　河出書房新社　1999 年
室賀信夫／海野隆一　「日本に行われた仏教系世界図について」

地理学史研究会　『地理学史研究Ⅰ』　臨川書店　1958 年
室賀信夫／海野隆一　「江戸時代後期における仏教系世界図」

地理学史研究会　『地理学史研究Ⅱ』　柳原書店　1962 年

●今回取り扱うことができなかった異域については以下の資料を参考にした。

青山宏夫　「古地図に描かれた想像世界」　平川南編　『環境の日本史１』

吉川弘文館　2012 年

青山宏夫　「メタモルフォーゼの列島史」　『総研大ジャーナル』　2001 年

青山宏夫　「海のなかの川を越えて」　『歴博』102

青山宏夫　「流宣日本図の地理情報」　『歴博』134

●授業で使った教科書／副教材

山川出版　『詳説世界史　改訂版』
とうほう　『世界史のミュージアム』

註１：写真やイラストなど描かれたモノに隠されている情報を読み取って表現する参加型の学習手法。国際理解教育分野では特に実践事例を重ねている。